防災情報新聞 ■毎月17日更新■ 2008年6月17日号 通巻第135号 ウェブ版 第3号

LATEST NEWS

NEW！☆特別リポート☆　サイクロン「ナルギス」の被災地へ医師団派遣 AMDAへインタビュー

取材先および関連資料リンク

AMDA、ミャンマー支援活動の一行が帰国（6月19日）

細村医師とAMDA現地看護師が、サイクロンの時に倒れてきた竹で頭部に負った傷の処置を行う（提供：AMDA）

ミャンマーを襲ったサイクロン「ナルギス」のへの支援を続けているAMDA（NGO・国際医療ボランティア組織　岡山市）は、日本人医師ら5名を6月8日からミャンマーのヤンゴン市およびクンジャンゴン市へと派遣、一行は19日に帰国した。

AMDAに活動内容と課題について聞いてみた。

■今回、日本からミャンマーに派遣されたメンバーを教えてください。

細村幹夫氏（内科医・呼吸器内科専門）、寺戸通久氏（救急医）、小堀他津子氏（看護師）、スェ・スェ・タン氏（ミャンマー人の医師）です。今回は調整員としてAMDAの緊急救援を担当している谷口敬一郎も同行しました。

■ どんな活動内容だったのでしょうか？

被災状況の把握や、ヤンゴン市とクンジャンゴン市の救援ニーズの調査を行い、両市の保健当局などと協議をして連携しながら活動をしました。

具体的には、AMDA医療スタッフが、保健省保健局および環境衛生局スタッフ、クンジャンゴン市医療スタッフと共同で巡回診療を実施しました。診療活動に加え、飲料水用錠剤、水浄化ネット、石鹸、保健教育教材などの配布や保健衛生教育を実施し、感染症予防にも努めました。

また、今回の活動では、地元ボランティアの皆さんにも積極的にかかわっていただきました。診療の受け付け、薬の調達など、巡回診療の円滑な運営に欠かせない存在として、力を発揮していただきました。

■ 主な疾患はどのようなものですか？

外傷、呼吸器感染症、皮膚の炎症が見られました。そのほか、発熱、風邪、下痢、胃痛や腹痛、倦怠感/衰弱などを訴える人が多かったです。また、女性の患者が全体の約70%を占め、年齢層では40歳代が最も多く、復興に重要な勤労世代が診療を求めています。

現地では、高温多湿な気候もあり、外傷が治りにくい傾向が見られました。また、家族を失い、精神的に落ち込む患者も多くみられました。中には、診療が終わった後も、ミャンマー人スタッフに被災した状況を詳しく説明し続ける被災者も見られました。

■現地へ行き、懸念される問題は何だと思われましたか？　また、どういった対策や支援が必要だと思われますか？

AMDAは、活動地であるクンジャンゴン市の31%の住民に対して支援活動を行うことができました（6月16日まで）。クンジャンゴン市においては、他団体を合わせると90%の住民に支援が行きわたったとされています。

しかし、幹線道路沿いは支援が届きやすく、そこから離れた地域には届きにくい傾向がありました。特に、雨期に入った現在、ボートでしか行けない地域へのアクセスはより困難になっています。

アクセスしにくい地域まで支援を届けるために、早期のインフラの復旧、各支援団体の情報共有と役割分担の徹底がなされ、支援に取り残される地域がないことを望みます。

AMDA

ミャンマー連邦大使館（英語）

——AMDAグループの菅波茂代表は「政治的な問題と災害支援は別物」と述べ、今後も持続的な支援を行っていく意向だ。